

# 生活科授業研究

神垣 信生・渡邊 重義

(理科教育講座)

平田 香代・大野 誠司

(附属小学校)

(平成14年5月16日受理)

## A study on life environmental studies teaching

Nobuo KAMIGAKI, Kayo HIRATA, Sigeyoshi WATANABE and Seiji OONO

### 1 はじめに

1, 2年生の子どもたちが興味をもつ対象は、自分が実際に見たり触れたりしたりできるものである。そして、自分からはたらきかけに対して、対象からはたらきかけが戻ってくる時、更に興味が増し、かかわりを更に求めることになる。ここに、子どもにとっての「学びたいこと」がある。学びの素材は、子どもが生活している中にこそあるのである。

子どもたちのこのような学びの中には、人、社会、自然が一体化して存在しているし、子どもたちの行動や思考、判断、表現も一体的になされている。心身及び自他の未分化な1, 2年生の子どもが活動をつくりだすとき、その活動もまた未分化なのである。そこには「教科」という枠はない。「やりたい」「楽しそう」といった子どもの思いが基となり、さまざまな内容を横断的融合的に含む活動となっているわけである。

さて、「生活科」とは、上記のような未分化性の強い子どもの特質を重視して生まれた教科で、子どもの生活圏を学びの素材とし、他の教科の内容を横断的に含む教科である。また、「生活科」では、子ども自身が自分の願いやめあてをもち、環境や他者にかかわり合いながら、その願いやめあてを実現していく過程そのものを重視し、その過程を経ることで自立の基礎を養うことをねらいとしている。

子どもたちの生活は、当然のことながらそれぞれに違っている。社会の急激な変化にともなって、子どもたちの生活や行動は、一層広がり、多様で個性豊かになってきている。だからこそ、ともに活動することで、互いに刺激しあいそれぞれの生活に広がり期待することができる。生活圏を学習素材とする「生活科」では、これまでの経験、生活環境がそれぞれに違う子どもたちがどんなことに興味・関心をもち、どんな活動を生み出していくのか、などもとらえ

ければならない。

しかし、1人の教師が大勢の子どもたちの活動や思いをとらえることには、限界がある。そこで、ビデオカメラを活用すれば、より多くの子どもたちの実態がとらえられ、支援に生かすことができるのではないかと考える。

## 2 附属小学校での授業実践

(1) 学 年 第1学年

(2) 単 元 名 あきをたのしもう

(3) 単元目標

- 秋と体全体でふれあい、秋を感じて遊びを楽しもうとする。
- 楽しさを求めながら、遊びをつくろうとする。
- つくった遊びをみんなで楽しもうとする。

(4) 単元構想 (全27時間)

次	予想される活動	具 体 的 な 活 動	時間
1	あきを さがそう	・ 校庭や公園で秋を見つける。 ・ 草花, 木, 虫, 空, 風などの変化に気付く。 ・ 服装, 食べ物, 行事などの違いに気付く。	9
2	あきで あそぼう	・ 木の葉の貼り絵, 飾り物などをつくる。 ・ ドングリ転がし, 的当てなどのゲームをする。 ・ 落ち葉を布団にしたり, 吹雪にしたりする。 ・ 生き物を探したり, 色水をつくったりする。	9
3	みんなで あそぼう	・ 友達と情報交換しながらみんなで遊ぶ。 ・ 幼稚園の友達にも伝えて, みんなで遊ぶ。	9

(5) 子どもの実態

子どもたちは、入学以来、草花遊びや虫取り遊び、草原での鬼遊び・坂転がり、どろんこ遊びなど、校内の自然と体中でかかわりながら友達と一緒に楽しんできた。しかし、活動中のこだわりや集中力には個人差があり、自分の思いにしたがって時間一杯活動に夢中になれる子もいれば、したいことが友達とのかかわりによって次々と変わり、活動にまとまりのつきにくい子どももいる。楽しい遊びをつくり出していく過程で、自分の思いをもつことと、それを実現していくことを繰り返し経験し、楽しんで活動することができるようになることを願っている。

(6) 本単元の意義

本校には、たくさんの大きな銀杏の木がある。イチョウの葉が美しく色づく季節である秋は、本校の子どもたちにとって、最も季節の変化を感じやすい季節である。校内において自然に感じることでできる「秋」は、子どもの興味をひき、時間を掛けて変化していく秋にふれることで意欲を持続させ、すぐ近くで繰り返しかかわることができ、夢中になれる素材である。また、秋の自然物(実や色づいた落ち葉など)は、意匠を凝らして遊びをつくることのできる素材であり、秋を感じることで遊びをつくり出して楽しむことが、同時に期待できる本単元を設定することとした。

自分たちがつくり出した遊びを楽しみ、充実感を味わうことができれば、その遊びを他の

人にも伝えたい、広げたい、たくさんの人と遊びたいというような気持ちになるのではないかと考える。昨年「秋のおみせ」に招待された経験をもつ本学年の子どもたちが多いことから、その状況に自然と向かうと思われる。そこで、附属幼稚園児との交流活動を設定し、自分のつくった遊びを伝える楽しさも感じさせたい。そうして、喜びをもって自己実現していくことを経験させたいと考える。

### (7) 支援の在り方

子どもたちが秋を感じる自然や状況はさまざまである。校内を主な活動場所としながらも、近くの公園や附属中学校などできるだけ多くのいろいろな秋を探し、感じるができるようにする。教師自身が、子どもとともに秋を感じ遊びを楽しむことで、子どもの快の予感を強めたい。

遊びをつくり出していく活動においては、発想力や創造力などの対象にはたらきかける力が必要である。と同時に、それらと絡み合ってはたらく想像力や思考力などの力も発揮されなければならない。そのためには、どんなドングリごまがよく回るか、どんな花や実が色水になりやすいか、どうすればより楽しくなるか、などといったことを考えたり試したりする支援をする。

また、交流活動では自分達のつくり出した遊びを伝え、一緒に遊ぶことを楽しむ。これまで遊んできた中で感じた快や不快を生かしながら「相手が楽しむために…」「より楽しむためには…」と思考させるような支援をする。

単元全体の活動を通して、楽しさを求めながらの遊びづくりが活動の大半であることから、大まかには秋のイメージをプラスイメージとしてとらえるであろうと思われる。活動を振り返りながら、楽しかったことや不思議に思ったことを言葉で表現させたり、秋に親しんだ自分、秋を心地よく感じた自分に気付かせる支援をする。また、葉が落ちた後の寂しい枯れ木や枯れ草の様子から冬に向かう自然にも目を向けさせ、もう一度感じた秋のイメージを膨らませたい。

### (8) 本単元で身に付けさせたい主な学習内容

生 活	○ 季節の変化に気付き、秋の自然に親しむこと。 ○ 自分なりに工夫しながら遊びをつくり、楽しむこと。
交 流	○ 幼稚園の友達にも遊びを伝え、みんなで遊びを楽しむこと。

### (9) 活動の様子と支援の実際

#### ア 1次（1～9時間目）

子どもたちが見つけた主な「秋」である。

2001年	
10月中旬	・ 蝉が鳴かなくなった。アメンボがいなくなった。
校庭	・ くじらぐもみみたいな大きな雲がいっぱい。 ・ 木に赤い実があった。赤いつぶつぶの草があった。 ・ 汗をあまりかかなくなった。
11月初旬	・ ズッコケランドの草が枯れてきた。
校庭	・ 虫（シジミチョウやトンボ）があまりいない。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひっつき虫（オナモミ），ブドウみたいな実を見付けた。</li> <li>・落ち葉が増えてきた。</li> <li>・風が涼しくなって，長袖の服を着ている。</li> <li>・あまりジュースを飲まなくなった。</li> </ul>	ひっつき虫で 名札にしよう
石手川公園	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ススキ，木の実，落ち葉，キノコなど</li> <li>・服にたくさんくっ付いてきた草の実</li> <li>・カエル</li> </ul>	こうやって集めたら ハリネズミになるよ
城山	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドングリ，キノコ，落ち葉など</li> <li>・幼虫</li> </ul>	
11月下旬 校庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大量の落ち葉，木の実</li> </ul>	この葉っぱはグーで この葉っぱはチョキ ジャンケンしよう

### イ 第2次（10～18時間目）

自然の中での活動も自然物を持ち帰っての室内での活動も両方を大切にしたいと考え、両方を交互に何度か繰り返して活動した。



屋外での活動は，体全体を使い五感をはたらかせての活動が多く，また，友達とかかわり合っでの活動となりやすい。自然物を室内に持ち込んでの製作活動では，これまでの経験や知識を，より認識して活動している。遊びをつくっていく中で見られた「このドングリはよく回るこまができるよ」「箱よりも缶の方がいい音が出るよ」「ひっつき虫だったら投げた玉がくっ付くかな？ セーターがくっ付きやすいな？」などのつぶやきや行動は，より楽しい遊びができるように工夫する姿であらうととらえられる。

次は，子どもたちがつくった遊びである。

- ・花びらや葉，草の実を使っての色水づくり
- ・貼り絵，お面づくり
- ・ドングリごま，ドングリ転がし・迷路，的当て，魚釣りなどのゲーム
- ・ドングリや葉や花を使ったネックレスなどの飾り物づくり
- ・モビール，リースなどの飾り物づくり
- ・葉っぱプール，葉っぱの布団，葉っぱの吹雪

- ・ 葉っぱ相撲、枯れ葉の音遊び、マラカスづくり
- ・ お化け屋敷

自然物を使っての遊びの中に、段ボール、モール、紙粘土、ビーズなどの人工的素材を用いることはごく自然に起こるし、それによってより楽しい遊びをつくることができる。活動が進むにつれ、扱う素材がこの人工的素材が主流となり、「秋を楽しもう」という意識よりも「遊びをつくろう」という意識が強まっていた。

### ウ 第3次 (19～27時間目)

製作活動の後は、それを使って互いに遊び合う。そして遊んだ感想を出し、その中からより楽しくなるヒントを得て、次の遊びに生かすようにした。



小物づくりをしていた子どもたちの「お店やさんを開こう」という発言を受け、他の子どもが「お客さんに幼稚園の子をよんだらいい!」と言い出した。すぐにみんなが賛成し、幼稚園の友達との交流に課題意識が向いた。そして、幼稚園の子どもたちを意識して遊びをつくり、楽しませるための方法を考えて、幼稚園の友達と交流の場をもった。

幼稚園の友達に、ゲームの仕方を話したり、くじを差し出したり、おみやげを手渡したり、案内をしたりした。また、屋外では葉を使って一緒に遊んだ。

### (10) ビデオの活用

校外での「秋を探す」活動、校外での「秋で遊ぶ」活動、話し合い活動、幼稚園との交流活動などをビデオ撮影し記録した。撮影者は学部教官である。「生活科」では、子どもたちの活動範囲がかなり広く、子どもたちはそれぞれの思いに従って活動場所を決めたり活動場所を変えたりするため、全体を撮影することや全ての活動場所で全員を撮影することは難しい。しかし、撮影者が柔軟に対応しながらできるだけ多くの子ども、できるだけ多くの活動を撮影するようにした。また、場面によっては、教師も同時に撮影し、その支援の実際が記録されるようにした。

教師は、撮影したビデオ記録を授業後に再生・視聴し、子どもたちの活動の様子やその活動にみえる個々の思いを推し量ったり、全体的傾向を分析したりして、評価と支援に生かした。

### (11) ビデオ活用の考察

- 活動範囲が広がると、1人の教師が把握できる子どもは少ない。教師の目から離れた場所での子どもたちの様子が見られることは、それだけで意義が大きい。次の活動を予想し

たり、活動の前の言葉かけをしたりすることができた。

- 言葉や文字での表現が苦手な子どもの思いは、活動中の発言や活動後の話し合い、また記録用紙の記入などの表現活動だけでは把握できない。表情や活動の様子から推し量ることになる。この点において、ビデオの活用は有効であった。
- 教師の支援方法について反省したり、子どもの思いを分析したりすることができた。
- ビデオを子どもたちに見せることで、これまでの活動を思い出させたり、友達の活動を知らせたり、自分の活動の様子を振り返らせたりすることも容易にできる。

### 3 「小学校教科・生活」における授業のビデオ記録の利用

石手川公園で行われた「第1次 あきをさがそう」における子どもの活動の様子をデジタルビデオカメラで録画し、子どもと自然との関わり方を示す事例として、「小学校教科・生活」の講義（渡邊担当）で利用した。図1は、その一場面である。野外では子ども達の活動の場が広がり、子ども達一人ひとりの活動等の実態を把握することが難しい。しかし、録画した授業記録を用いると、授業中は見逃してしまうような子どもの行動やつぶやきに目を向けることができる。そこで、「小学校教科・生活」の講義では、授業記録の中から以下の6つの場面に注目し、それぞれの場面について1～3分程度の映像と音声をコンピュータに取り込んだものを教材として用いた。注目した場面は次の通りである。

- ① ススキと児童の関わり場面：児童がススキの穂をほうきに見立てたり、かんざしのように髪の毛に付けたりしている様子
- ② 児童がキノコを発見した場面：ある児童が木の洞に生えていた小さなキノコを発見し、そこに次々と児童が集まってくる様子
- ③ カマキリの卵を介した児童と教師の関わり場面：児童が見つけたカマキリの卵について教師と児童が会話する様子
- ④ 児童がチカラシバの穂を採集している場面：チカラシバの穂の毛をハリネズミの毛に見立てながら採集している様子
- ⑤ 児童がハトを追いかけている場面：一人の児童が地面を歩いているハトを追いかけて、最後には両手でつかむ様子
- ⑥ 野外での学習のまとめの場面：野外での学習の終わりに教師がまとめをする様子



図1 「あきをさがそう」での、石手川公園での活動

授業者は、これらの場面をそれぞれにつき2, 3回繰り返して提示し、学生に気づいたことや感想を記述させ、何名かの学生にはそれを発表させた。学生の感想には次のようなものがみられた。

「ススキを見ても大人なら通り過ぎるだけなのに、ふりまわして本当に楽しんでいる様子がかがえる。何でも遊び道具にできる能力がすごいと思った。」(①ススキ)

「…、子どもたちは、ひっこぬき、自分の手でさわり、自分の遊び道具の一つとして身近な自然を使っているのがおもしろかった。」(①ススキ)

「手で触るのがこわいのか、木の棒でつついたり、葉っぱで持ったりしている。」(②キノコ)

「[笑いキノコかな?][マシュマロ?][しめじ]など知っているキノコの名前を挙げている。」(②キノコ)

「リーダー的な男の子が「落ち着け」という社会性が見えた。」(②キノコ)

「断然カマキリの卵に興味があるのが、男の子たち。女の子たちは興味を示さず、周りでススキをユラユラさせながら遊んでいる。」(③カマキリ)

「[先生、先生]と発見を先生に伝えたい気持ちが前面に出ている。」(③カマキリ)

「少し気持ち悪くて触りにくいものを、先生が児童の手を持って触らせていたのが印象的であった。」(③カマキリ)

「一人の子が「ハリネズミ」と言うと、周りの子にもどんどん伝わって、みんなが「ハリネズミ」と言っていた。」(④チカラシバ)

「何でもない植物でも「ハリネズミ」のような一言で記憶に残る植物になるところが、興味深く、面白かった。」(④チカラシバ)

「ハトを捕まえようとするのは、いいか悪いのか…。実際にハトを捕まえようとする子は一人で、他は外野で騒ぐだけだった。」(⑤ハト)

「横から見ている子どもの中から「弱っているから嫌だ」というように、ハトに対して思いやりを持つ子もいる。」(⑤ハト)

「自分もさわりたいのか、ずっと横についていていた友達がいた。飛んでいったハトからぬけていた羽根を拾って、どう思ったのだろうか。」(⑤ハト)

「集めた植物を何に使うのか質問して、次の時間の活動を子どもに自覚させている。」(⑥まとめ)

「集めたものをどうするか、と問いかけることで、探検しっぱなしで終わらないことが大切だと思った。」(⑥まとめ)

「[色水にする]と言った子は、取ったときはどうするか考えていなかったと思うけれど、教師が「どうしますか?」と質問することによって、どうするかを考え、アイデアを出していた。」(⑥まとめ)

「小学校教科・生活」は3年生後学期に開講される科目であり、受講生は後学期の授業が始まる直前に小学校教育実習を経験している。したがって、学生達は自分の経験を振り返りながらビデオ記録を視聴し、「生活科」における児童の実態について考えることができたのではないかと考えられる。ビデオ記録の提示は、学生にいろいろな観点からの気づきや感想を引き出し、講義内容を深める意味で有効であった。

#### 4 おわりに

本研究では、附属小学校における「生活科」の授業のうち、教室内及び教室外での児童の多様な動きの画像と音声を VTR に記録した。これによって、1人の指導者（授業者）だけでは目が届かない場面をも記録に留めることで、授業風景の全体像の把握に VTR 併用の有効性を確認することが出来た。今後は、さらに「生活科」の実践授業並びに「小学校教科・生活」における学部学生の授業への有効なビデオ記録の利用法について検討していきたい。

本研究は、平成13年度の教育学部長裁量経費をもって遂行されたことを記し、謝意を表すものである。なお、著者の1人（平田 香代）が附属小学校紀要に記載したもの<sup>1)</sup>を、一部転用した。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 初等教育研究紀要 第39号 平成14年2月 愛媛大学教育学部附属小学校発行